

尾形亀之助著作目録

岩下, 祥子

<https://doi.org/10.15017/1398578>

出版情報 : 九大日文. 21, pp.47-75, 2013-03-29. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

尾形亀之助著作目録

IWA SHITA
S.A.O.P.O.
岩下 祥子

はじめに

尾形亀之助は第二詩集『雨になる朝』（誠志堂、一九二九年五月）の「後記」に、

ここに集めた詩篇は四五篇をのぞく他は一昨年作品なので、今になつてみるとなんとなく古くさい。去年は二三篇しか詩作をしなかつた。

と記している。尾形の妻、優もまた当時の尾形について、

昭和四年五月、第二詩集「雨になる朝」を刊行致しました。その前年の年の暮、私は彼と一緒に暮すようになりましたが、その頃から彼は次第に詩作しなくなり、多くの詩友とも故意に遠ざかつて行きました。（『現代日本詩人全集12』創元社、一九五四年四月）

と、述べており、『雨になる朝』刊行時の尾形が盛んに詩を書いていないことが示されている。しかし、『色ガラスの街』（恵

風館、一九二四年十一月）刊行後から『雨になる朝』の刊行までの間は、尾形の詩が多く雑誌に掲載されており、尾形や優の言葉のみでは、詩作の実体が掴み得ない。他の時期においても同様で、詩誌の掲載状況と詩人の詩作の状況とを照らし合わせることで尾形の詩作を考える上で必要なのである。

また、尾形の詩の詩想を明らかにする際の大きな手がかりとして詩型の問題が挙げられる。『雨になる朝』に収録された作品は短い行分け詩で書かれ、翌一九三〇年に刊行された『障子のある家』（私家版、一九三〇年九月）は全篇散文詩で書かれており、詩集のみに目を向けると、この一年に詩型の移行が凝縮されていると目されかねない。このように、尾形の詩への意識を確認するためにも、著作を發表年ごとに整理することは重要であると考へ、目録作成に至つた。

今回、目録を作成するに当たり、一つの作品を初出、再出、詩集収録、アンソロジー所の都度、明記し發表年順に列挙した。本稿では著作目録の發表にとどまり、論考は稿を改めるが、作成した目録中、備考欄の空白部が確然と減ることからも『雨になる朝』、『障子のある家』には書き下ろしの作品が少ないことが判然とする。前掲の尾形の「後記」が詩集刊行と作品執筆の時期のズレを語っていることから分かるように、『雨になる朝』の作品は殆どが一九二六年から一九二八年に發表されている。また散文詩型については『障子のある家』中の作品が印象深い。ため、詩集刊行年を区切りとすると一九三〇年以降の詩作に用いられていると見られるが、実際は『雨になる朝』刊行前に「学

校」に発表された「五百七十九番地」「二月」等は散文詩型であり、『障子のある家』中の数篇の作品は一九二九年時に発表されていることが窺える。ここで改めて、『雨になる朝』の刊行が『障子のある家』を書く尾形にとって「厭はしい思ひ」（前掲「後記」「雨になる朝」）であったことが納得される。

『尾形龜之助全集』は『尾形龜之助全集』（思潮社、一九七〇年九月）、『尾形龜之助全集』増補改訂版（思潮社、一九九九年十二月、以下両全集を指す場合は『全集』と略記し、区別する場合は一九七〇年版、増補改訂版と付す。）の二冊が刊行されている。『全集』を編纂した秋元潔は二〇〇八年に他界した。秋元は『尾形龜之助論』（七月堂、一九九五年八月）の「おわりに」において「全著作目録を最後につけくわえられなかったこと」を心残りの一つとして挙げ、「これから尾形研究をなさる奇特な人」に目録作成を託し

凡例

- 一、この目録は『尾形龜之助全集』（思潮社、一九七〇年九月）、『尾形龜之助全集』増補改訂版（思潮社、一九九九年十二月）を基に、収集可能な『全集』未収録作品とともに、尾形龜之助の著作を発表年月順に配列したものである。『全集』未収録作品は「★」を付し備考欄に記した。
- 一、作品の改稿や異文については『全集』における秋元潔氏の「編注」を参照し、可能な限り作品を確認した上で転記した。しかし作成者が確認し得なかつた掲載誌、刊行物もあり、それらは「掲載誌」欄の誌名・書名の下に「☆」を付している。「改稿」と「異文」については、言葉が著しく凝縮されていたり、行数の大幅な削減が見られた際「改稿」とし、語尾の変化、語の削除や挿入など、比較的変更が少ない場合を「異文」としており、作品を確認した上、秋元氏の『全集』編注に倣っている。
- 一、今回の目録作成に当たり、絵画、図録は対象外とし、尾形の生前の著作物のみに対象限定した。従って、一九四二年十二月二

ている。増補改訂版『全集』は『尾形龜之助論』以後に刊行されており、秋元は、一九七〇年版『全集』から洩れていた尾形の著作を増補改訂版『全集』に多く収録した。しかし、増補改訂版『全集』の刊行から年月を経て、新たな『全集』未収録資料も発見されている。今回発表する「尾形龜之助著作目録」は、尾形を考察する上で不可欠である年代別に作品の発表を把握することと、『全集』未収録資料を反映した著作の整理を行うことを目的として作成した。尾形は同じ作品を、掲載誌を変えて複数回発表している。目録作成後尚感じられることは、異文、改題、改稿の多さに見られる、作品への執着である。この点が「詩」への執着と如何に結びつくのか、今後改めて考察したい。

以下、「凡例」に続き、「尾形龜之助著作目録」を発表する。

日の尾形の没後に刊行されたアンソロジー等も対象外としている。

一、複数の作品が同一の雑誌巻号に発表されている場合は、一作品にのみ掲載誌巻号を記し、あとの「掲載誌」欄は前に倣う意で空白とした。

一、一作品をそのまま、或いは改題・改稿し、複数回発表しているものは、その都度、発表年月の目録に入れた。しかし備考欄における、再出、収録、所収、改題、異文についての説明はその作品の初出時のみ記し、初出以後の箇所では初出のみを示している。

一、作品を読解した上で『全集』での類別を参照し、詩、短歌、小品、物語、随筆、評論、詩集評、シナリオ、映画評、詞華集評、アンケート回答に分けた。詩と、雑誌の「編輯後記」以外の作品には作品名の上にポイントを下げ太字で作品の部類を記載した。

一、「備考」で掲載された刊行物を示す際は個々に年月を記した。ただし、尾形の三冊の詩集『色ガラスの街』、『雨になる朝』、『障子のある家』の刊行年月は省略した。

一、目録中、小字の丸括弧は作成者の注であり、それ以外は作品名の一部である。

一、仮名遣い、おどり字などはそのままにし、旧漢字は新漢字に改めた。

一、なお、本目録は作品の初出が掲載されている雑誌のすべてを探し得ていないなど、十分な一覧表とはなりえていない。不備や遺漏をご教示していただければ幸いである。

《尾形亀之助著作目録》

年月

作品

掲載誌

備考

一九一九年二月

短歌 日へのぼる

「FUMIE〈踏絵〉」第一輯☆

三月

POWER

「FUMIE〈踏絵〉」第二輯☆

短歌 踏絵第一回短歌会詠草（三十日）

掲載誌不明☆

四月

短歌 花日記

「FUMIE〈踏絵〉」第三輯☆

五月 短歌 踏絵第二回短歌会詠草（四日）

短歌 踏絵第三回短歌会詠草（二十九日）

掲載誌不明☆
掲載誌不明☆

六月 短歌 ふたつの命

「FUMIE（踏絵）」第四輯☆

七月 短歌 平和のまつりに

「FUMIE（踏絵）」第四輯⁽¹⁾☆

一九二〇年八月 短歌 冬

「玄土」創刊号

短歌 短歌会詠草

十一月 短歌 鯉ぬすみ

「玄土」十一月号

一九二二年四月 若いふたりもの
春のある日

「玄土」第三卷第四号

五月 死

随筆 其の夜の印象

「玄土」第三卷第五号☆

六月 題のない詩

「玄土」第三卷第六号☆

八月 一ぼんのやくるま草

「玄土」第三卷第八号

ある詩

六月 無題

★『全集』未収録。
★『全集』未収録。

九月 昼

「小石川の風景詩」と改題、『色
ガラスの街』収録。異文あり。

随筆 洋画展覧会の記

日付は一九二二年六月二十七日。

随筆 旅をしたあと

『色ガラスの街』収録。異文あり。

随筆 旅をしたあと

日付は一九二二年八月十二日。

随筆 さびしい路

「玄土」第三卷第十号☆

「白い路」と改題、『色ガラスの

初秋

カフエーのひところ

十二月 嵐のばあさん

「玄土」第三卷第十二号☆

「街」収録。異文あり。
日付は一九二二年九月三日。
日付は一九二二年八月。

一九二三年四月

手

颯風の日

「詩人」四月号

「五月」と改題、『色ガラスの街』収録。異文あり。

一九二四年一月

酒場から

六月

曇天

「上州新報」(二日)☆

『詩集左翼戦線大正十二年版』

(日本詩人協会)

『色ガラスの街』収録。異文あり。

俺

酒場

無題

一九二五年十月

恋

十一月

序の一 りんてん機とアルコポン

序の二 煙草は私の旅びとである

八角時計

明るい夜

散歩

音のしない昼の風景

十二月の無題詩

「抒情詩歌」創刊号

詩集『色ガラスの街』(恵風館)

★『全集』未収録。

春（春になつて私の心はよくなまけてゐる）

題のない詩

夜の庭へ墜ちた煙草の吸ひがら

昼の部屋

夜半 私は眼さめてゐる

煙草

昼ちよつと前です

秋

病氣

寂しすぎる

猫の眼月

隣の死にそうな老人

ある来訪者への接待

一本の桔梗を見る

昼の雨

曇天

月が落ちてゆく

彼は待つてゐる

螻蛄が這入つて来た

春

天国は高い

私 私はそのとき朝の紅茶を飲んでゐた

私は待つ時間の中に這入つてゐる

初出『詩集左翼戦線』（一九二四年六月）。

春の街の飾窓

犬の影が私の心に写つてゐる

五月の花婿

無題詩

十二月の路

五月

無題詩

美しい娘の白歯

今日は針の気げんがわるい

女の顔は大きい

とぎれた夢の前に立ちどまる

二人の詩

顔が

或る話（辞書を引く男が疲れてゐる）

雨降り

秋の日は静か

夕暮れに立つ二人の幼い女の子の話を聞く

一日

白い手

十一月の晴れた十一時頃

風

ある男の日記

昼 床にゐる

初出「詩人」四月号（一九三三年四月）。

無題詩

四月の原に私は来てゐる

馬

日向の男

昼の部屋

月を見て坂を登る

ハンカチから卵を出します

商いに就いての答

昼

無題詩

無題詩

黄色の夢の話

七月

うす雲る日

十一月の私の眼

少女

彼の居ない部屋

旅に出たい

雨

蟲

美しい街

無題詩

たひらかな壁

初出「玄土」三卷九号（一九三二年九月）。

或る少女に

七月の 朝の

小石川の風景詩

初出「玄土」三卷八号（一九三二年八月）。

あいさつ

風のない日です

女が眠つてゐる

昼のコツクさん

夏

無題詩

夕暮れに温くむ心

風邪きみです

白い路（或る久しく病める女のために私

はうつむきに歩いてゐる）

不幸な夢

東雲（これからしのめの大きい瞳がは

じけます）

ある昼の話

夜の花をもつ少女と私

九月の詩

黄色の袋の中

雨 雨

年のくれの街

情慾

初出「玄土」三卷十号（一九三二年十月）。

毎夜月が出た

一九二六年一月

物語 白い昼の狐

〔月曜〕第一卷第一号

編輯後記

〔月曜〕第一卷第二号

物語 影を

〔月曜〕第一卷第三号

編輯後記

〔月曜〕第一卷第四号

編輯後記

〔近代詩歌〕第二卷第五号

物語 朝馬鹿

〔月曜〕第一卷第五号

編輯後記

春

〔太平洋詩人〕第一卷第二号

編輯後記

〔銅鑼〕七号

編輯後記

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

編輯後記

〔垂〕二十四号

蛙が鳴くので月の出がおそい

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

蛙が鳴くので月の出がおそい

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

蛙が鳴くので月の出がおそい

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

蛙が鳴くので月の出がおそい

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

馬鹿息子 (No.11)

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

馬鹿息子 (No.11)

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

馬鹿息子 (No.11)

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

秋

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

物語 悪い夢 或ひは「初夏の憂鬱」

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

物語 悪い夢 或ひは「初夏の憂鬱」

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

さびしい夕焼の饗応

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

西風

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

十一月

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

十一月

〔太平洋詩人〕第一卷第三号

★『全集』未収録。

★『全集』未収録。

★『全集』未収録。

日付は一九二六年三月。改稿後

『日本詩選集一九二八年版』(一九二八年一月)所収。

『雨になる朝』収録。

★『全集』未収録。

「愚かなる秋」と改題、『雨になる朝』収録。

★『全集』未収録。

〔垂〕二十五号

出してみたい手紙 (1)

出してみたい手紙 (2) (雨の日の風呂

の中の鼻歌)

十一月の電話 (※「季節」の副題あり)

戯曲 彼等の喧嘩 (一幕)

顔がない

大人さへ子供じみる

初秋

夜店

PAPAとその娘

十二月

九月の半日

火鉢のある部屋

雨降る夜

蜜柑

隨筆 飲酒

青柿の秋

幼年

泣いてゐる秋

街風

月夜の電車

詩集評 詩集「兵隊」のラツパ

『雨になる朝』収録。

「九軒」一の巻☆

「銅鑼」八号⁽²⁾

『日本詩選集一九二八年版』(一九二八年一月)所収、異文あり。

「太平洋詩人」第一卷第四号

「亜」二十六号

「詩文学」創刊号

「銅鑼」九号

「詩神」第二卷第十二号

日付は一九二六年十月六日。

一九二七年一月

煙突と十二月の昼

「亜」二十七号

「十二月の昼」と改題、改稿し

蜜柑

美しい街

眠つてゐるうちに夜になつてゐた

羽子板

毒葉

隨筆 牛乳屋の煙突と風呂屋の煙突

隨筆 西曆一九二七年

ガラス窓の部屋

十二月

家

昼は街が大きすぎる

夜がさみしい

花（仮題）

曇天の停車場

物語 青狐の夢

十一月の午後

昼の花

冬日

詩集評 「検温器と花」 私評

夜は凍える

二月

「詩神」第三卷第一号

「近代風景」一月号

「青きつね」二の巻

「京都詩人」第二卷第一号⁽⁴⁾ ☆

「太平洋詩人」第二卷第一号

「太平洋詩人」第二卷第二号

「詩と詩論」二冊（一九二八年十二月）に掲載。『雨になる朝』収録。

「垂」企画（体温表）。⁽³⁾

「垂」企画（体温表）。

『雨になる朝』収録。異文あり。

「昼の街は大きすぎる」と改題、

『雨になる朝』収録。

『雨になる朝』収録。異文あり。

風

平らな街

詩集評 詩集「半分開いた窓」私評

寢床と冬

冬日

落日

三月

雨と街

夜が重い（笑つたやうな顔をして来る朝
陽に袋をかぶせる）

越年

隨筆 私と詩

二月失題

受胎

十一月

小説 北海道の旅

評論 「日本英傑伝抄と野村君」と私（日

本英傑伝抄と野村君）の改題⁽⁵⁾

夜の部屋

冬無題

アンケート回答 現詩壇に対する感想要望

暗がりの中

隨筆 漫筆御免

春が来る

「銅鑼」十号

「亜」二十八号

「詩神」第三卷第三号

「若草」第三卷第三号

「太平洋詩人」第二卷第三号

「文藝」第五卷第四号

「詩壇消息」第一卷第四号☆

「太平洋詩人」第二卷第四号

『雨になる朝』収録。

「雨の祭日」と改題、『雨になる朝』収録。異文あり。

★『全集』未収録。

曇天の三月

「文章倶楽部」四月号

親と子

随筆 コーリン・ムアーと黒子

「若草」第三卷第四号

六月

小品 犬の化けもの、躑躅、雀、燕

「文学祭」六月号

十月

街へ行く電車

蚊帳の中

「詩神」第三卷第十号

ビスケツト

十一月

物語 窓

「詩文学」第二卷第五号

秋 電燈

「民謡詩人」第一卷第三号

森の中・女・夏草

「A CORNER SHOP」第一輯☆

随筆 不思議な喫煙者

随筆 美少女

随筆 眼鏡をかけてゐる人——例へば福富

青児君——

随筆 書きかけの書きにくい手紙

シナリオ 電車の中で——喜劇風のシナリオ——

「映画往来」第三卷第十一号

十二月

随筆 A Corner Shop

「A CORNER SHOP」第二輯☆

随筆 或る恋愛

詩集評 詩集・たんぼぼ

随筆 詩人と小説との妙な関係に就て

随筆 装幀

随筆 註

『雨になる朝』収録。異文あり。

日付は一九二七年五月十二日。

未完。

隨筆 A—B—C—5

隨筆 仏蘭西の士官は街角をまがつて

「亜」三十五号

行つた

小品 アラン酒（短篇）

再出「FANTASIA」第一輯（一九二九年六月）。

小説 話（小説）—或ひは「小さな運動

「詩神」第三卷第十二号

場」—

一九二八年二月

松の木の憂鬱

「都会思想」第一卷第一号☆

春

『日本詩選集一九二八年版』

夜店

初出「近代詩歌」二卷五号（一九二六年五月）。

恋愛後記

初出「銅鑼」八号（一九二六年）。

春は窓いつぱい

夜

『雨になる朝』収録。

煙草と花

「北方詩人」第二卷第一号☆

初冬の日

『雨になる朝』収録。

映画評 人生興奮（その一）

小品 こけし人形

「映画往来」第四卷第三十七号
『こけし這子の話』（仙台郷土趣味の会）

秋色

『雨になる朝』収録。

菊

「現代文芸」第五卷第一号
「詩神」第四卷第二号

白（仮題）

再出「詩と詩論」二冊（一九二八年十二月）、「烟」（一九二九年七月号）。

二月

三月

風の中

夜の部屋

昼寝が夢を置いていつた

映画評 人生興奮(その二)

隨筆 部屋の中

眼が見えない

小品 月と手紙―花嫁へ―

四月

戀愛後記

隨筆 早春雜記

シナリオ 口笛の結婚マーチ(シナリオ)

オ)―「人生興奮」その三として―

五月

七月

九月

梅雨の中

いつまでも寝ずにみると朝になる

幻想

十二月

雨になる朝

戀愛後記

十二月の昼

「北方詩人」第二卷三号☆

「東北文学」第一号

「映画往来」第四卷第三十八号

「現代文芸」第五卷第二号

「文芸」第六卷第三号

「全詩人聯合」創刊号

「映画往来」第三卷第四十号

『音楽新篇』高田守久作曲集』

(ハレルヤ楽社)

「詩神」第四卷第九号

「曼陀羅」一号☆

「詩と詩論」第二册

『雨になる朝』収録。異文あり。

『雨になる朝』収録。

『雨になる朝』収録。

『雨になる朝』収録。

一九二八年三月の日付あり。

再出「詩と詩論」二册(一九二八年十二月)、『雨になる朝』収録。

★『全集』未収録。

再出「詩と詩論」二册(一九二八年十二月)、『雨になる朝』収録。

「幻影」と改題、『雨になる朝』収録。

『雨になる朝』収録。

初出「全詩人聯合」創刊号(一九二八年四月)。

初出「亜」二十七号(一九二七年

白（仮題）

一月）。

白（仮題）

「白に就て」と改題、『雨になる朝』収録。再出「畑」（一九二九年七月号）。

いつまでも寝ずにみると朝になる

初出「詩神」四卷二号（一九二八年二月）。

夢

初出「詩神」四卷九号（一九二八年九月）。

雨が降る

『雨になる朝』収録。
『雨になる朝』収録。

一九二九年一月

隨筆 跡

「詩神」第五卷第一号

二月

詩華集評 詞華集・航海読後感

「詩集」第三卷第二号

五百七十九番地

「学校」二号

三月

詩集評 詩集「第百階級」に依る草野
心平君其他

「詩と詩論」第三冊

心平君其他

「学校」三号

『雨になる朝』収録。

四月

二月（詩集「雨になる朝」の序として）
物語 B

「文芸ビルデング」第三卷第四号

五月

序 二月

詩集『雨になる朝』（誠志堂）

初出「学校」三号（一九二九年三月）。

序 冬日

再出「詩神」五卷八号（一九二九年八月）。異文あり。

十一月の街

再出「あんだんて派」一輯（一九二九年十一月）。

花

雨になる朝

坐つて見てゐる

落日

昼寝が夢を置いていつた

小さな庭

初夏一週間（恋愛後記）

原の端の路

十二月の昼

親と子

昼

昼

夜 疲れてゐる晩春

かなしめる五月

無聊な春

日一日とはなんであるのか

郊外住居

家

初出「詩と詩論」二冊（一九三八年十二月）。

初出「銅鑼」十号（一九二七年二月）。

初出「東北文学」一号（一九二八年三月）。

再出「あんだんて派」一輯（一九二九年十一月）。異文あり。

初出「亜」二十七号（一九二七年一月）。

初出「文章倶楽部」四月号（一九二七年四月）。

初出「詩神」三卷一号（一九二七

白に就て

年一月)。

初出「詩と詩論」二冊(一九三八年十二月)。

白(仮題)

初出「詩神」四卷三号(一九三八年二月)。

雨日

暮春

秋日

初冬の日

恋愛後記

初出「北方詩人」二卷一号(一九二八年一月)。

初出「全詩人聯合」創刊号(一九二八年四月)。

いつまでも寝ずにみると朝になる

初出「詩神」四卷九号(一九二八年九月)。

初夏無題

初出「太平洋詩人」一卷二号(一九二六年七月)。

曇る

夜の部屋

初出「北方詩人」二卷三号(一九二八年三月)。

眼が見えない

初出「現代文芸」五卷二号(一九二八年三月)。

昼の街は大きすぎる

初出「詩神」三卷一号(一九二七年一月)。

十一月の電話

初出「亜」二十五号(一九三六年

十二月

十二月

夜の向ふに広い海のある夢を見た
夜

窓の人

お可笑な春

愚かなる秋

秋色

幻影

雨の祭日

夜がさみしい

夢

雨が降る

題はない

十一月。

初出『日本詩選集一九二八年版』
(一九二八年一月)。

初出「亜」二十四号(一九二六年
十月)。

初出「現代文芸」五卷一号(一九
二八年一月)。

初出「曼陀羅」一号(一九二八年
九月)。

初出「亜」二十八号(一九二七年
三月)。

初出「詩神」三卷一号(一九二七
年一月)。

初出「詩と詩論」二冊(一九二八
年十二月)。

初出「詩と詩論」二冊(一九二八
年十二月)。

「五月」と改題、『学校詩集』(一
九二九年十二月)、『全日本詩集』(一

「学校」五号

九二九年十二月)所収。『障子のあ
る家』収録、異文あり。

詩集評 詩集「血の花が開くとき」

小品 硝子戸に蛇がとまつてゐた

隨筆 さびしい人生興奮

小品 アラン酒(短篇)

「詩神」第五卷第五号

「文芸レビュー」第一卷第三号

「詩と詩論」第四冊

「FANTASIA」第一輯

初出「亜」三十五号(一九二七年
十二月)。

七月

詩評 痛ましき月評

小品 R氏のノート

白に就て

「詩神」第五卷第七号

「文芸ビルデング」第三卷第七号

「畑」七月号

初出「詩と詩論」二冊(一九二八
年十二月)。

白(仮題)

初出「詩神」四卷二号(一九二八
年二月)。

八月

詩評 机―詩神七月月号評―

冬日(詩集「雨になる朝の序として」)

アンケート回答 わが待望する芸術(二)

「詩神」第五卷第八号

「宣言」創刊号

「氾濫」(汎濫)再刊号⁽⁶⁾☆

★『全集』未収録。
『学校詩集』(一九二九年十二月)、『新
興詩人選集』(一九三〇年一月)所

十月

三月の日

収。『障子のある家』収録、異文
あり。

詩集評 詩集「鶴」を評す(主としてその

読者のために)

十一月

暗夜行進

「門」第六輯☆

秋冷

『学校詩集』(一九二九年十二月)、

評論 童心とはひどい

評論 宮崎孝政論

十一月の街

初夏一週間（恋愛後記）

十二月 三月の日

「詩神」第五卷第十一号
「あんだんて派」一輯☆
『学校詩集』（麦書房）

五月

秋冷

五月

『全日本詩集』（文書堂）

詩集評 彼、彼と私と其の他の人 「感想

集・詩集鯉とその作者について」⁷⁾

アンケート回答 一九二九年に発表せる私の
詩に就いて 「詩神」第五卷第十二号

一九三〇年一月

詩人の骨（仮題）——転落する一九二九年
のへボ詩人の一部

「詩と散文」一号

『日本現代詩選』（一九三〇年四月）
所収。『障子のある家』収録、異
文あり。

初出『雨になる朝』。

初出『雨になる朝』。

初出「氾濫」再刊号（一九二九年
十月）。

初出「学校」五号（一九二九年五
月）。

初出「門」六輯（一九二九年十一
月）。

初出「学校」五号（一九二九年五
月）。

「詩人の骨」と改題、『南有集』
（東北書院、一九三二年九月）所収、
『障子のある家』収録、異文あ
り。

三月の日

『新興詩人選集』（文芸社）

初出「氾濫」再刊号（一九二九年

十月）。

日付は一九二九年十一月九日。

二月

隨筆 身辺雑記

アンケート回答 〈現代詩人全集〉に入れ

る人にして吾々の詩壇まで生きのびる

と思ふ人は誰々か）

「南方詩人」猪狩満直詩集記念号
「詩文学」第一卷第一号⁽⁸⁾

詩集評 大至急左の詩集を批評せよとの

「詩神」第六卷第二号

「悲しきパン」「叛く」「雲に鳥」「蒼

馬を見たり」「真冬」「全日本詩集」

の指定を快諾、更に加へてかなしく

も人生を語る

評論 馬鹿でない方の北川冬彦は「読め」
障子のある家（仮題）——自叙転落する一

「文芸月刊」第一卷第一号

九二九年のへボ詩人・其七

副題を削除し再出「新興詩人」
二卷六号（一九三〇年三月）、原題
で『日本現代詩選』（一九三〇年四
月）所収。改題「ひよつとこ面」
で『障子のある家』収録、異文
あり。

三月

障子のある家（仮題）

「新興詩人」第二卷第六号☆

物語 地球はいたつて平べつたいたので

した

標—蹟く石でもあれば、俺はそこでこ

ろびたい

「文芸月刊」第一卷第二号

「詩文学」第一卷第二号

再出「門」七輯（一九三〇年七月）、
所収『現代新詩集』（一九三二年六

評論 中村漁波林

四月

秋冷

障子のある家（仮題）―自叙転落する一

九二九年のへボ詩人・其七

父と母と、二人の子供へおくる手紙

『日本現代詩選』（金星堂）

「桐の花」九号☆

五月

無形国へ

貧乏第一課

家

「詩神」第六卷第五号

家

「二ヒル」一卷三号

家

「旗魚」六号

俺は自分の顔が見られなくなつた

アンケート回答 A、芸術の商品化に就いて

て B、今後の貴下の創作態度に就いて

「文芸解放」創刊号

月。「年越酒」と改題し、『障子のある家』に収録、異文あり。

★『全集』未収録。

初出「門」六輯（一九二九年十一月）。

初出「文芸月刊」一卷一号（一九三〇年二月）。

後記「泉ちゃんと獵坊へ」「父と母へ」と改題、『障子のある家』

収録。

「第一課 貧乏」と改題、『障子のある家』収録。

「二ヒル」一卷三号（一九三〇年

五月）、「旗魚」六号（同）に掲載。

『障子のある家』収録、異文あり。

「詩神」六卷五号、「旗魚」六号の三誌に同年同月に発表。

「二ヒル」一卷三号「詩神」六

卷五号の三誌に同年同月に発表。

「印」と改題、『障子のある家』

収録、異文あり。

★『全集』未収録。

七月 標―蹟く石でもあれば、俺はそこどころ

「門」七輯☆

びたい

八月 因果の序

「詩神」第六卷第八号

へんな季節

『障子のある家』収録。

詩集評 詩集 軍艦茉莉

座談会 詩神第三回座談会

九月

詩集『障子のある家』（私家版）

自序

★『全集』未収録。

五月

初出「氾濫」再刊号（一九二九年十月）。

秋冷

初出「門」六輯（一九二九年十一月）。

ひよつとこ面

初出「文芸月刊」一卷一号（一九三〇年二月）。

詩人の骨

初出「詩と散文」一号（一九三〇年一月）。

年越酒

初出「詩文学」一卷二号（一九三〇年三月）。

印

初出「旗魚」六号（一九三〇年五月）。

第一課 貧乏

初出「詩神」六卷五号（一九三〇年五月）。

へんな季節

初出「詩神」六卷八号（一九三〇年八月）。

学識
家

おまけ 滑稽無声映画「形のない国」の梗概

後記 泉ちゃんと獵坊へ

後記 父と母へ

物語 カルルス煎餅

十月 おまけ 滑稽無声映画「形のない国」の
梗概 「詩神」第六卷第九号
「詩神」第六卷第十号

隨筆 机の前の裸は語る

座談会 詩神第四回座談会

一九三二年六月 標一 蹟く石でもあれば、俺はそこどころ
『現代新詩集』(詩文学社)

びたい

初出「詩文学」一卷二号(一九三〇年三月)。

一九三三年九月 詩人の骨
『南有集』(東北書院)

十月 辻は天狗となり 善助は堀へ墜ちて死ん

「新詩論」第一冊

だ 私は汽車に乗つて郷里の家へ帰つてゐる

初出「詩と散文」一号(一九三〇年一月)。
『現代日本詩集一九三三年版』(詩人時代社、一九三三年四月)所収。

「詩神」六卷五号(一九三〇年五月)、「二ヒル」一卷三号(同)、「旗魚」六号(同)に掲載。

再出「詩神」六卷十号(一九三〇年十月)。

初出「桐の花」九号(一九三〇年四月)。

初出「桐の花」九号(一九三〇年四月)。

初出『障子のある家』。

日付は一九三〇年八月十日。

一九三三年一月 足のない馬

「猷滞」二号

二月 迎春失題

「新詩論」第二冊

四月 辻は天狗となり 善助は堀へ墜ちて死ん

『現代日本詩集一九三三年版』

だ 私は汽車に乗つて郷里の家へ帰つ

(詩人時代社)

初出「新詩論」一冊(一九三三年十月)。

てゐる

八月 追悼文 石川善助に

『鴉射亭隨筆』(鴉射亭友達会)

九月 小説 在郷詩人之図

「人物評論」第一年第七号

十月 追悼文 明滅

「岩手日報」(二十七日) ☆

原題「友人感想」⁹⁾
★『全集』未収録。
『宮沢賢治追悼』(次郎社、一九三四年一月)所収。

十二月 隨筆 秋日私記

「詩人時代」第三卷第十二号

一九三四年一月 追悼文 明滅 その一 その二

『宮沢賢治追悼』(次郎社)

十二月 隨筆 私信に代へる

「L'ESPRIT NOUVEAU」第二冊

一九三五年二月 俳句 枇杷の果(十句)

「蕉舍句帳」☆

五月 庭園設計図案(或る忘備帖)

「歷程」一号

一九三六年十一月までの作品が収録。

一九三六年三月 隨筆 体のこと

「歷程」二号

一九三七年十二月 又は三角形の歴史―クレオパトラ

「むらさき」十二月号

一九三九年四月 隨筆 宮沢賢治第六十回生誕祝賀会(第

「歷程」六号

二夜)

七月 風邪

「歷程」七号

『歷程詩集紀元二千六百年版』(山
雅房、一九四一年二月)所収。

一九四一年二月 風邪

『歷程詩集紀元二千六百年版』

初出「歷程」七号(一九三九年七
月)。

九月 残冬
雨二ヌレタ黄色

「歷程」十六号

一九四二年九月 大キナ戦(1 蠅と角笛)

「歷程」十九号

年月日不明

短歌 桐畑の落葉(十一首)⁽¹⁰⁾

不明

★『全集』未収録。

※ 目録作成に当たり仙台文学館に資料の提供を賜った。特に、短歌「桐畑の落葉」(掲載誌不明)、「ある詩」「六月」(玄土)三卷八号、
一九二二年八月、「七月」(音楽新編第5田守久作曲集)ハレルヤ楽社、一九二八年五月)、アンケート回答「わが待望する芸術(一)」(「宣言」
創刊号、一九二九年八月)、アンケート回答「A、芸術の商品化に就いて B、今後の貴下の創作態度に就いて」(「文芸解放」創刊号、一
九三〇年五月)は『全集』未収録の作品として貴重であった。また「白に就て」「白〈仮題〉」の「畑」(一九二九年七月号)への発表は
仙台文学館にて初めて確認させていただいた。ここに厚く御礼を申し上げる。

【注記】

1 増補改訂版『全集』の「FUMIE(踏絵)」の説明に発行年は「大正八年

を確認できないため、ここでは増補改訂版『全集』に倣い「FUMIE(踏
絵)」第四輯」とした。

二月と同年七月」となっており、刊行冊数は「全五冊」とあるが、同誌

2 「銅籬」八号には刊行月が記載されていないが、小関和宏「詩誌『銅籬』

の変遷」(『日本の詩雑誌』有精堂、一九九五年五月)では十一月と推定されている。

3 「体温表」は二人の作者が同じ題で詩を書き、表の形式で掲載したものを。

「羽子板」「毒薬」の相手は北川冬彦である。

4 佐々木靖章『自由詩人』『京都詩人』目次と解題(『文献探索』2000年5月、二〇〇六年五月)において、「京都詩人」創刊号(第二年二月号)一九二六年八月〜一九二七年二月)の目次が発表されており、第二年一月号(一九二七年一月)に尾形亀之助「十一月の午後」「昼の花」が確認される。佐々木氏は扶桑書房主人から『京都詩人』4冊を見せられ、「その場で購入し」たものに依って、目次の発表に至っている。

5 「日本英傑伝抄と野村君」と私(日本英傑伝抄殿村くん)の改題」が作品名。

6 「太平洋詩人」第一巻第一号(一九二六年五月)には「汎濫」(赤松月船代表、汎濫社)の広告があり、発刊時期と月船による刊行という点から照合し、「汎濫」は「汎濫」の誤りである可能性が考えられる。『日本現代詩辞典』(桜楓社、一九八六年二月)で安部宙之介が担当している赤松月船についての記述の中では「汎濫」となっている。『現代詩大事典』(三省堂、二〇〇八年二月)においては平澤信一が赤松月船について「朝」(のち「汎濫」と改題)を主催」と書いている。「汎濫」、「汎濫」ともに

探し出せず、調査の途中である。

7 「感想集・鯉とその著者について」は宮崎孝政の詩集『鯉』(鯉発行所、一九二九年九月)の刊行を記念してつくられた文集。

8 『全集』では「詩文学」の巻号が明記されていないが、『現代詩誌総覧』において、一九三〇年二月が創刊であることが記されており、第一巻第一号の目次は未詳であるが、同巻二号(一九三〇年三月)の目次が確認できるため、ここでは一巻一号と推定した。

9 「石川善助に」という表題は一九七〇年版『全集』収録時に編者(草野心平・秋元潔)によって付されたもの。本来は「鴉射亭」と号した石川善助に因み彼の没後遺稿と友人感想をあつめて鴉射亭友達会から刊行された小冊子」に「友人感想」として掲載されたもの。(一九七〇年版『全集』編注)。

10 仙台文学館編『尾形亀之助展―それからその次へ』(仙台文学館、二〇〇〇年十一月)に、『玄土』の編集者三浦一篤氏のご子息から、『玄土』関係資料を一括ご寄贈いただいたなかに、尾形亀之助の名が付された原稿が含まれていた」とあり、「桐畑の落葉」はその一部である。しかし「桐畑の落葉」は発表誌不明」のままであり、ここでは目録末部に置いた。仙台文学館にて自筆原稿を見せていただいた。

(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程二年)